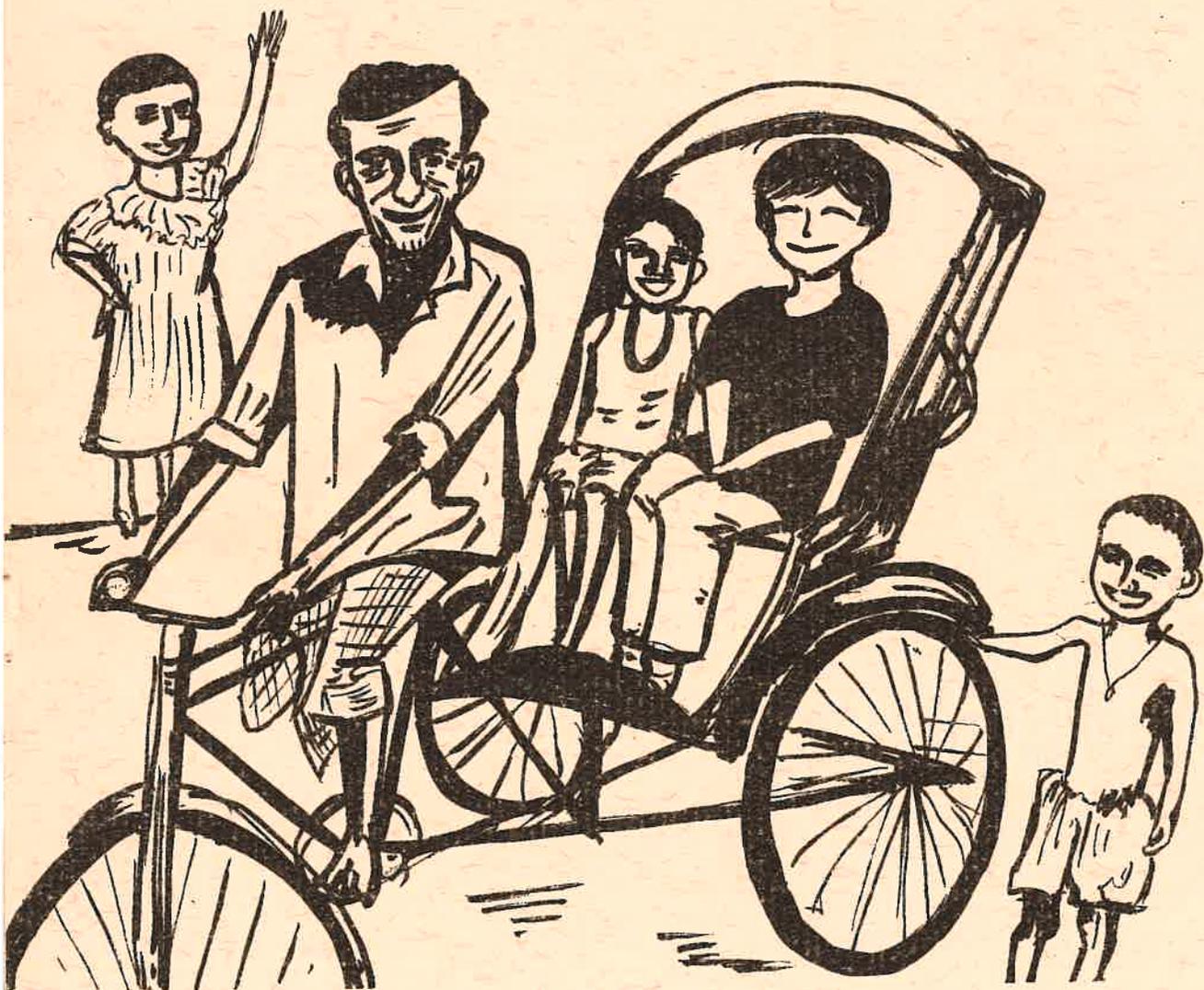


ACEF  
第19回バンングラディッシュ  
寺子屋訪問スタディツアー



2000.8.4 ~ 8.18



# 10年目の喜び

船戸良隆

今回のスタディー・ツアーには、東京シネビデオの宮崎さんと須原さんが一緒に行ってくださいました。というのは、ACEF10周年記念ビデオの撮影のためです。二人ともチームメンバーにみごとにとけ込み、宮崎さんは先生方と歌をうたい、須原さんは大粒の汗を流しての撮影が印象的でした。わずか1週間の滞在でしたが、BDPスタッフ、先生方と本当に親しくなり、帰りの空港では、涙の別れだったそうです。お二人のご好意に心から感謝いたします。

さて、今回のツアーは総体的に見てとてもよかったと思いますが、私にとって特に印象深かったことは、プーバイルでBDP寺子屋学校の先生を10年間続けてきた方々5人から話を聞いたことでした。バングラデシュの農村で、女性が10年間も先生を続けることは、並大抵のことではありません。プーバイルで寺子屋学校が始まった時、先生方は、真っ暗な土蔵の中で教えていたり、文字通りの青空学級、大きな木の下で箆を敷いて教えたりしていました。

この10年間、どんな苦しいことがありましたか、という質問に対しても、日本だったら当然でくるような待遇のこととか、設備の悪さなどはなく、「子どもたちがいろいろな理由で学校に来られなくなったことが、一番つらかった。」という答えには強くうたれました。ほとんど全ての人が、家族の協力と励ましに感謝していると答えていましたがバングラデシュの農村で、この方々は恵まれていたなあと、私自身もそのご家族の方々に感謝の思いを持ちました。

しかし、何といても最も素晴らしいと感じたことは、先生方自身の成長ぶりでした。10年前は、私など外国人の前で話をするなどは思いも寄らず、顔を見せることすら恥ずかしがっていた方々が、今では堂々と意見を述べています。そして、彼女ら自身、村の人々から尊敬され、村改革の先頭に立っているのです。みんな朗らかに、喜びと自信をもって先生としての仕事に励んでいる、その姿は、BDPの宝です。先生方、ひとりひとりに心からの感謝と声援を贈りたいと思いました。

[ 4, AUG, 2000 ]

11=30 成田発  
 | バニワ経由 17=30 着  
 | 18=30 発  
 20=50 DHAKA 着  
 17=50 ← バニワ time

18=50 カリタス 着  
 | 自己紹介・夕食・シヤワ  
 22=00 就寝

[ 5, AUG, 2000 ]

6=00 起床  
 6=30 ラジオ体操  
 6=50 尚会礼拝  
 7=30 朝食  
 9=00 BDP presentation  
 12=30 昼食  
 13=30 shopping (New market)

16=15 帰宅  
 17=40 町内出発  
 19=10 70-バイル到着  
 20=30 夕食  
 21=30 晩禱  
 ? 就寝

[ 6, AUG, 2000 ]

6=00 起床  
 6=30 ラジオ体操  
 7=00 朝食  
 7=40 教会へ  
 8=00 礼拝  
 9=30 学校見学へ  
 12=00 帰宅

12=30 昼食  
 15=00 BDPの先生が講話  
 17=30 711-911  
 20=00 夕食  
 20=30 晩禱  
 ? 就寝

[ 7, AUG, 2000 ]

6=00 起床  
 6=30 ラジオ体操  
 6=40 朝禱  
 7=00 朝食  
 9=00 Vocational schoolへ  
 10=30 乗船

11=00 学校見学  
 12=30 学校出発  
 13=00 昼食  
 14=00 711-911  
 17=00 B4-4, 70-バイル出発

→ こうして B4-4 は 町内に戻り、  
 9日ケテラに移動!!  
 A4-4 は、そのまま明日 シヤマル  
 70-バイルへ向け出発!!

[14, AUG, 2000]

→ A4-4, B4-4 再会です。

19:30 夕食  
| 711-714  
? 就寝

[15, AUG, 2000]

6:00 起床  
6:30 ラジオ体操  
7:30 朝食  
9:00 A-B4-4 合同 sharing  
12:30 昼食  
14:45 culture show  
19:15 夕食  
21:00 晩禱  
? 就寝

[16, AUG, 2000]

6:30 起床  
7:00 ラジオ体操  
7:30 朝食  
9:30 学校訪問  
12:00 帰宅  
13:00 昼食  
14:00 Bangladesh National Museum  
16:00 New market ^  
18:00 Aarong  
20:00 帰宅, 夕食  
20:30 晩禱  
? 就寝

[17, AUG, 2000]

7:00 起床  
7:10 ラジオ体操  
7:30 朝食  
8:00 朝禱  
8:30 711-714  
shopping, packing  
11:20 Dr. マリヒク discussion  
13:00 昼食  
14:10 sharing with staff  
15:30 閉会礼拝  
16:00 tea time  
18:20 空港到着  
21:00 DHAKA 発  
| 11:37 経由 23:00 着  
00:00 発

[18, AUG, 2000]

6:00 成田着  
9:00 ← 日本 time

## —BDP, ACEF って?—

### BDP (Basic Development Partners)

「教育は、人間としての尊厳と生きる力を育てるための基礎である」1990年、教育の重要性を痛感した医師、ミナ・マラカール女史が、首都ダッカのスラム地区で幼稚園を始めたことがきっかけとなって設立された、ベンガル人によるキリスト教のNGO 団体です。学校に行けない子どもたちのためにBDP スクールを建て、バングラデシュに教育を普及させることを目的としています。また、教育の普及によってバングラデシュの貧困を撲滅することを願っています。

現在、バングラデシュの4地区でBDP スクールに通う子どもは、8500人。最近では、初等教育のほか、女子教育や婦人教育にも力を入れています。

現在、マラカール女史は高齢のため、アルバート・マラカール氏が引き継ぎ、若いスタッフと共に、高い志と熱い意欲を持って取り組んでいます。

### ACEF (アジアキリスト教教育基金)

マラカール女史の呼びかけに答えて、バングラデシュの教育の機会に恵まれない子どもたちに「寺子屋を贈ろう」と日本で発足したNGO 団体。バングラデシュを始め、広くアジアに目を向け、多くのことを学びながら現在の私達の生活を見つめなおし、アジアが抱える問題を捉えています。

現在、使用済みテレカやアルミ缶回収、セミナーの開催のほか、国際協力に積極的に関わる人材の養成を目的に、年2回のスタディーツアーや学生による勉強会が行われています。

### ACEF と BDP の関係

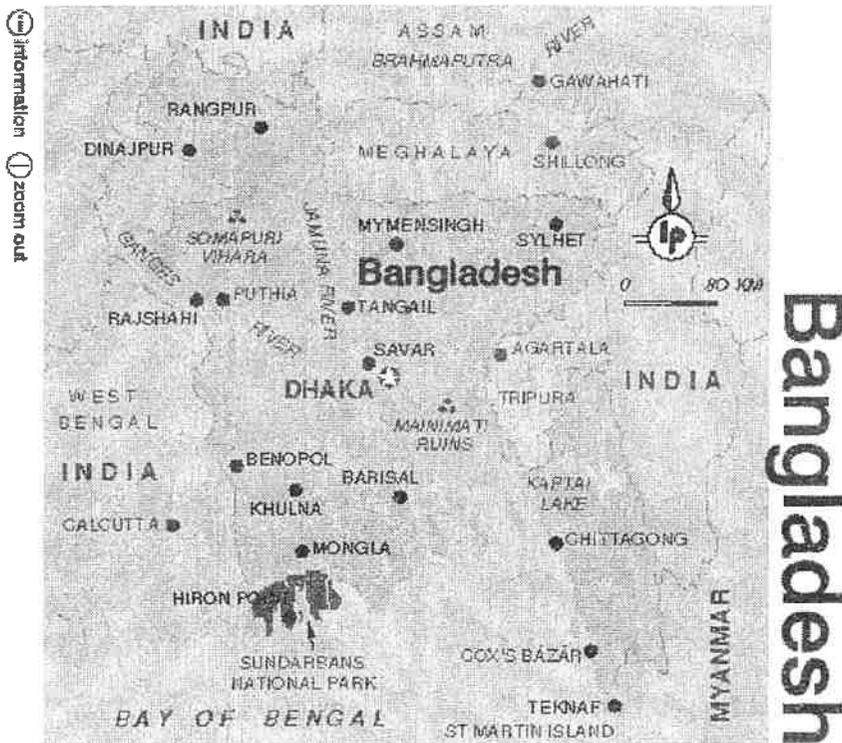
ACEF は BDP に財政的な援助をしていますが、その関係は与える側・もらう側という関係ではなく、対等な co-worker として活動しています。発足から10年、この2つの団体が守られ発展してきた原動力は、まさにこの信頼関係にあるのです。

# —BANGLADESH って?—

## Bangladesh (バングラデシュ)

インド大陸の東に位置し、熱帯モンスーン気候帯に属するイスラム教国。4～10月の雨季には、ガンジス・ブラマプトラ・メグナ川の3大河川が氾濫し、広域にわたる洪水が起こる。

北海道の2倍の国土に1億3000万の人々が住み、増えつづける人口に経済が追いつかず、世界で最も貧しい国のひとつとされる。幼い子どもが家庭のために働かなければならず、学校に通えない子どもも多い。



# DHAKA

# STAFF

アルバートさん  
BDPの総責任者。  
Mr. BEANに似ていて、  
ジョークもおもしろい。  
話が長いことを  
気にしないようです。



ヘモントさん  
BDP教育担当。  
歌が上手。歌う  
お兄さんです。  
私たちに  
「みなさん、ごはん  
でーす。」  
と叫んでくれます。



ファルコ  
さん  
BDPの総務  
担当。  
無口でちょっと  
シャイです。  
笑顔をやさしくと  
マッサージが  
好きです。



オシムさん  
BDPの“名”  
ドライバー。  
いつも時間より早く  
目的地に着くことが  
できます。  
“ナビ”が好き。  
独自の足取りを  
みせてくれます。



ソンチョイ  
さん  
私たちを  
ニューマーケットや  
博物館に連れて  
行ってくださいましたね。  
牙長さんという言葉  
に反応していました。



リヒコさん  
ミルポール地区(ガッカ)の  
責任者。  
いつもステキな  
サリーを着ていました。



# ポ ー バ イ ル ス タ フ

ラハニさん

となりで LOVE SONGを  
歌ってくれます。

サンク"ラスカ"  
がこいいて"すね。



オモルさん

"庭にはニ羽にわとりが"いる"  
や、"私はあなたもとてもとても  
愛しています"など、日本語を  
話してくれます。



エソックさん

ポ-バイル地区の責任者。  
やさしくていつもニコニコ  
しています。

プロキムさん & プロカシさん  
二人とも職業訓練学校の  
先生です。

いつも二人一緒に笑い続けて  
いました。

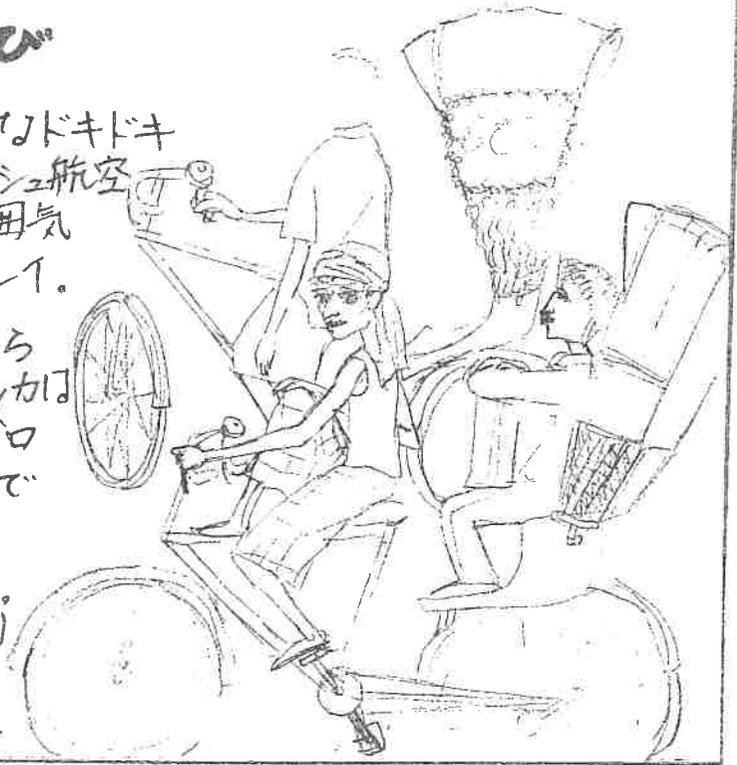


# 8月4日 金 ようび

**出発**の日となりました。みんなドキドキワクワクしてます。バンブーラデッシュ航空のスケジュールは少し怖い雰囲気でしたが、サリーを着てとてもキレイ。

**到着**しました。ダッカ空港からスタッフの迎えでBDPまで。ダッカは人ヤリキシャでいっぱい、その上ジロジロ見られます。初めての経験でとても楽しかったです。

**食事**を初めて手で食べました。なかなかに美味しくないので真剣に食べてしまいました。でも、とてもおいしかった。ごちそうさま。

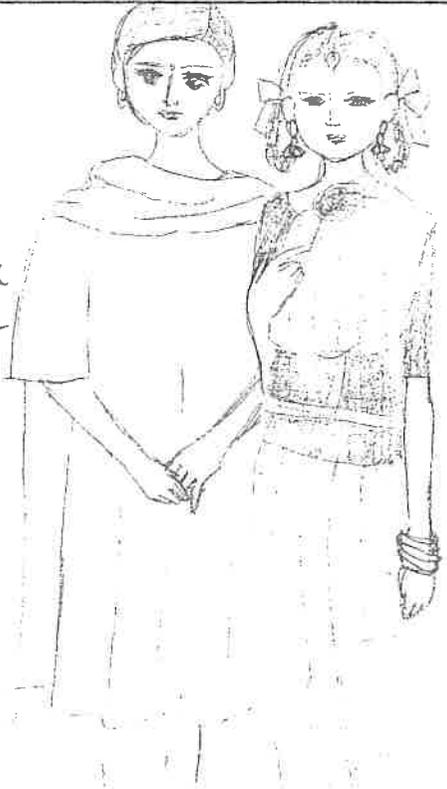


# A B の

# 8月5日 土 ようび

**市場**へ行きました。ダッカのバザールはたくさんの人、物で活気がありました。女性陣の目的はサロワカです。せっかく来たのだから同じ様にバンブーラの服を着ようとそれぞれお気に入りのサロワカを買いました。

**プーバイル**へは夕方から、バザールの買い物の後に出発しました。着いてみると都市のダッカと違った村。電気も薄暗く、停電もあり、お風呂も井戸から水とくんでとてかかぶる。より日本とかけ離れた生活へ。でもなせが住み良。あ、バンブーラだまを再認識してうれしくなりました。

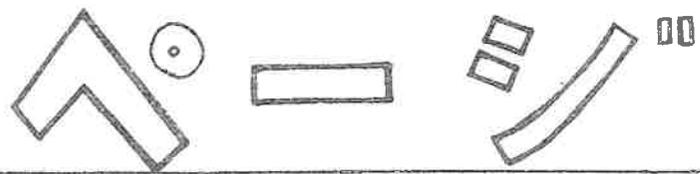


8月6日 日 ようび

**教会** へ朝食後参加、牧師さんの言っている事はわからないうけれど、聖歌を聞いたり、雰囲気を感じたりと、パンダラの人達のお祈りを肌で感じることができました。

**小学校** へその後、初めて訪問しました。ウゥ、カワイイ。私達も隣に座り、一緒にツレ勉強して歌を歌いました。日本の歌は気に入ってもらえたかな？

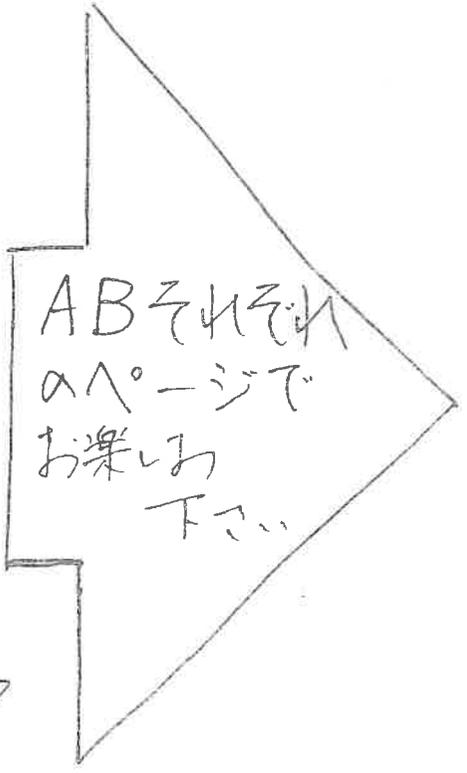
**先生** 達とのディスカッションは英語もあまり通じなかったので苦戦、でも一生懸命話を聞いて笑いかけてくれました。ありがとう先生。



8月7日 月 ようび

**職業訓練学校** へ行きました。電気などの専門的な事を学んでいて、みんな卒業後の夢を持ち、一生懸命勉強していました。本当にすばらしく感心しました。教育の機会が十分に与えられている私達とは、ここまで真剣に夢を持ち、勉強に取りくんだ事があるでしょうか。考えさせられました。

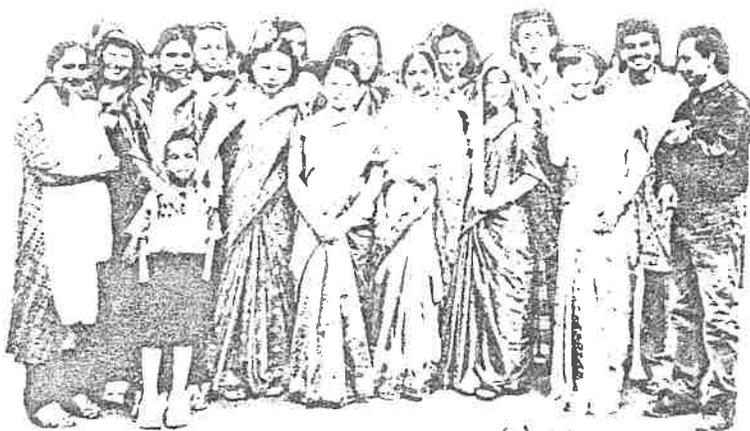
**なんと** 次の日にABチームは別れる予定だったのにストの関係で今日別れる事に。寂しいけれどここからは別々の思い出をつくりましょう。笑顔で「またね」とあいづつを交わしました。



# Aチームのみんな



のりこさん



ナオミ



イリ



アキラ



# Tamarpul Staff



ショフイーウさん  
ゴパルプール地区の  
責任者です。

歌声がとてもステキです。

体の調子があまりよくなかった  
ようだったので、  
どうかお大事に。



ハビフ" data-bbox="662 119 899 202"/>

ウィンクや肩の動き  
がセクシーです。

"ジロパニ・パニ"  
が好き。  
(ハカリズット)

モクレスさん



モクレスさんの

お父さんもSEPの  
スタッフでした。

最近幸せいっぱい  
のモクレスさん。  
おなかの  
あたりが...

バシエツトさん  
自己流ミュージックを  
みせてくれます。  
ピョマニカが上手です。  
バングラの踊りも  
披露してくれ  
ました。



ケン



ジロマルの  
男たち

バシエツト

オサムさん

モクレス

モタレフさん  
お世話係を  
してくれました。  
ジャイだけど、  
笑顔がとても  
かわいいです。



マズドさん  
ボクジャシの  
ただ1人の  
スタッフです。  
アガシに  
似ている  
からいい  
です。



# Aチームのジャマルプール・ボクシガンジ日記

## 8月7日曇のち晴れ（ブーバイル）

午後、カティラへ向かうBチームは、明日ダツカがストになり、交通機関が動かなくなるため、急遽ダツカへ向かう。Bチームの人と別れて、スタッフは本当に寂しそうでした。その後、スタッフとしばし休憩。バングラの歌や日本の歌を教え合い、しばし文化交流……。アルバートさんがこっそり飲ませてくれたコーラの味は最高でした。その後、宿舎の近くのヒンドゥー教徒の家へ家庭訪問。私たちが行くと、子どもたちが、ウワァッと集まってきました。家は広く、一族みんな住んでいるよう。TVもありました。私たちに、生まれたてホヤホヤの赤ちゃんを抱かせてくれ、感激。

夕方には、スタッフと一緒に日の入りを見に散歩へ。雲で夕焼けはあまり見れなかったが、そのかわり、薄桃色の空に月が。田んぼの中では水牛が耕し、あたりをとんぼが飛んでいます。のんびりとしたとても美しい風景でした。

## 8月8日曇・雨（ブーバイル→ジャマルプール）

午前中、フロキットさんの親戚の家や、オモルさんの名付け親の家を訪問。チャナチユーや、ビスケットで、もてなしてくれました。私たちが訪問したブーバイルの村は、イスラム教徒、ヒンドゥー教徒、キリスト教徒が隣り合わせて住んでいます。しがし、何事もなく、仲良く暮らしているそうです。キリスト教徒のおばさんに、「あなたは、いつキリスト教徒になったの?」と聞いたら、「生まれたときからよ。」という答えが返ってきました。バングラデシュでは、みんなそれぞれ宗教を持っているそうです。無宗教が多い日本と比べ、考えさせられる話でした。今日で、ブーバイルスタッフともお別れ。ブーバイルスタッフと別れるのは寂しかったです。

オシムさんの運転（とつてもワイルド。おかげで時間が相当節約されました）で、ジャマルプールへ到着。着くと早々、子どもたちが遊びに来ました。子どもたちに手を引っ張られて子どもたちの家へ連れて行かれてしまうというハプニングも。とにかく、スタッフを始め、大家さん、子どもたちの歓迎に心温まった。ジャマルプールの宿舎の周り一面田んぼや池。道ばたでは牛（ゴルル）、山羊（サゴール）、ニワトリ（ムルギー）などがいます。リエのベッドの近くに、何やらヒカヒカ光るへんなものが、といたら、蛍（ジョナキー）だったということも。とにかく自然がいっぱい。何となく、田んぼの風景が日本の田舎を思い起こさせる、という意見もありました。

明日からジャマルプールの生活、学校訪問が始まります。

## 8月9日雨のち晴れ（ジャマルプール）

今日も、あきらの声で起床。そして、雨の中、ラジオ体操をし、朝拝、朝食。ジャマルプールの、お母さん家族がつくってくれる食事は本当においしい。

「ミナサン、ゴハンデース」by ヘモントさん

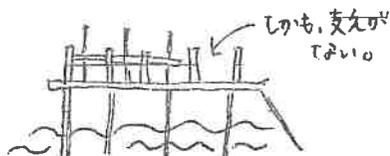
これがなくっちゃね。

「チャー、ティン」

こんな感じです。



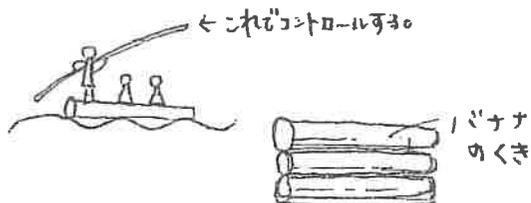
雨がうまく止んで、9:00にポイタマリー・アタバラスクールに、みんなの念願のリキシャで向かう。道はぬがるんていて、リキシャのおじさん達は大変そうでしたが、終始ニコニコ。私たちもおじさん達のリクエストに応え、ジャバニガンを精一杯歌いました。そして、途中、竹の橋を渡る。スタッフに助けられながらも、ドキドキで渡りました。けっこう楽しんでた人もいましたが(?)。



ポイタマリー・アタバラスクールは竹で出来た学校です。村の人が提供して下さった土地に建てられた、手作りの小屋のような学校です。とても印象的だったのは、私たちの歌や子どもたちの歌の後の質問タイムで、「学校が出来たことで何が一番よかったですか。」という質問に対し、村人の一人が、「村が一つに

団結して、嬉しい。」と語ったことです。BDPの学校が、子どもたちだけでなく、様々な良い影響を与えていることが、新鮮でした。帰りも、子どもたちがずっとついてきて、ニコニコしていました。

帰りは、あの恐ろしい竹の橋を渡らず、バナナボートで、2人ずつ乗って行きました



が、3人乗ったら(ケンとイノリ)沈んでしまいました。オシユビダ・アチエ。でも、ボートを漕いでくれる村人がすぐに飛び降りてくれて、助かりました。向こう岸にいた村人たちは、おかしそうに笑っていました。

帰ってからは、みんなよく歩いて疲れたからお昼寝。子どもたちもたくさん遊びに来て、みんなでボール遊びなどをして遊びました。

スタッフは、私たちが楽しく過ごせるよう、とても気づかってくれます。スタッフ、おもしろ過ぎです。バジェットマジック、そろそろ登場(?)。ナオミは一時体調を崩したが、無事回復。明日も素敵な出会いがたくさんありますように。

## 8月10日曇のち晴れ (ジャマルプール)

今日は、2つの学校を訪問しました。午前中は、リキシャで1月に完成したばかりの、出来立てホヤホヤのジョトムツラスクールへ向かった。とても遠くて、片道1時間半の道のり。途中の家は、土壁の家。学校は、まだ出来立てなので、一学年だけでした。楽しそうにアルファベットを習う姿が、印象的でした。ここでは、パイナップルを頂きました。私たちが行くと、めずらしいらしく、たくさんの村人が集まってきました。外国人を見るのは、初めてだそうです。帰りには、通り道にあるバスチヨラスクールへ少しだけ寄りました。

そして、午後は車でランゴジュラスクールへ。校舎は嵐で崩れてしまったので、使っていない民家を借りたものでした。そこでは、singerになりたいという女の子が私たちに歌を披露してくれました。みんなうっとり。私たちはドレミの歌を合奏。ながなが(?)

好評でした。帰りには、スタッフのバシエットさんの実家を訪れました。一族総出でもてなしてくれました。バシエットさんは、心なしが気恥ずかしそうでした。いろんな年代の人がいて、その頂点は、お父さんでした。バングラデシュは家族の絆が強いと感じました。

そして夜、私たちは待ちに待った music show を行いました。スタッフ側と、私たちの歌や、踊りの出し合い。熱気がムンムン。バングラデシュの伝統的な歌から、ラブソングまでヘモントさん、バシエットさん、モクレスさんのうたの素晴らしいこと。ルンギとハチマキの伝統衣装姿も素敵でした。とにかく、私たちも、ケンの故郷青森の、ねぶた祭りのラッセーラーや、ひげダンスなどで、対抗したのですが、スタッフ側には圧倒され通してました。

私たちは、スタッフと歌や踊りや、ジョークで、急速に親しくなっています。これからも、健康に気をつけて、実りある滞在が出来るようにと思います。

### 8月11日曇りのち雨（ジャマルプール）

今日は、バングラデシュは金曜日で休日。したがって学校も休みのため、みんなで、ボート・トリップへ出ることになりました。スタッフ達は、ボートを一隻借り切ってくれ、チャーや、お菓子を積んで、ピクニック気分でした。移動や学校訪問 etc. で疲れ気味なので、ちょうどいい休みになる、と思ったのですが、また歌合戦が繰り広げられました。本当に、スタッフのタフなことには驚かされます。途中、岸边にある民家へ立ち寄りしました。ここは、雨が降ると、たびたび家が水に浸かるそうで、家の人たちは明るく、ニコニコしていましたが大変だろうと思い、つらかったです。

そして、昼食を食べた後にしばし昼寝。その後、4:00にBDPの先生たちが来て、私たちにサリーを着せてくださいました。それぞれ好きなサリーを着せてもらい、お化粧をした私たちは、ノットンボウ（新香）容ではしゃいでしまいました。ケンも民族衣装を着せてもらったのですが、その容は、りりしくて、とても素敵でした。

本当に、このチームはよく食べる。今日の牛肉&パパイヤカレーはとても美味しかったです。ジャマルプールの料理のお母さんたちに感謝です。

### 8月12日晴れ（ジャマルプール→ボクシガンジ）

今日で、ジャマルプールともお別れです。リキシヤのおじさん達が私たちが発つのを知ってか、見送りに来てくれました。せつなく仲良くなって遊んだ子どもたちや、食事を作ってくださったお母さん達や、その他もろもろの人とお別れです。7時出発の予定が2時間遅れて9時出発となりました。ボクシガンジはバングラデシュ北部の山岳地帯であり、インドから国境約1kmの所にあります。山から象がおりてきて、住民の畑を荒らしてしまう。夏も比較的涼しい場所です。山岳地帯には、モンゴロイド系の顔立ちをした、ガ口族というバングラデシュの少数民族がベンガル人と隣り合わせて暮らしています。私たちはそのガ口族の学校をこれから2日間で訪れます。

ボクシガンジへ着き、洗濯や休憩をしていると、宿舎の門の所で子どもたちが見えています。そのうち何人かが入ってきて、一緒に遊びました。午後は、小川を渡って、学校へ。素足で渡る小川はとても心地よかったです。かなり歩いて、学校到着。本当に小さな学校で、7~8畳しかありません。ここではベンガル人もガ口族も一緒に勉強していま

す。子どもたちは私たちを見て、驚いていましたが最後に笑顔を見せてくれました。帰りにはガロ族を家庭訪問。家の垣根をかき分けていくと、そこには、私たちにとても似た顔が！ とても親近感が湧きました。

忘れていけないのが、ボクシガンジただ一人のスーパーバイザー、マストドさん。ガロ地区すべての学校を一人で任されています。とてもがっこいいです。

### 8月13日雨のち曇り時々晴れ（ボクシガンジ）

今日は日曜です。朝食後ガロ族の教会へ行きました。ガロ族の人たちは皆キリスト教で、熱心に教会へ通っているそうです。教会ではガロ族の牧師さんが熱心に説教をしており、そこでほんの小さな子どもから、おじいちゃん、おばあちゃんまで、熱心に聞き入っていました。そしてきれいな讃美歌。バングラデシュの人は皆歌が好きみたい。ガロ族の言葉（マンディー語）で歌われた讃美歌は、とても素敵でした。そして説教やお祈りの後、ヘモントさんのオルガンで私たち、みんな一緒に讃美歌を歌いました。やはり共通するものがあるのでしょうか、一つになったような気がしました。

教会の張り紙で、日本人の行方不明の人のポスターを発見しました。20年くらい前のものだそうです。教会の帰りにティグラトマスクールを訪問。いつも思うのだけれど、ヘモントさんの子どもたちへの話はうまい。どんどん子どもたちの声が大きくなるのがわかる。子どもたちを引き込むのが何てうまいのだ。そして宿舎へ帰って昼食。この食事もとても美味しいのです。4時、トゥムトラスクールへ出発。授業後には質疑応答や日本のことを紹介する時間がありました。ここで、晶のサゴールバッチャの声、ケンの猿のまね、バカ受けてした。

田舎にいるのも最後になり、みんな疲れが出てきたようである。佳織の腰痛や、その他のアダルトチーム3人もめまいや疲れでダウン。美笛のアリナミンを飲んで昼寝をしました。アダルトチームもヤングチームに負けないようにがんばってほしい。

### 8月14日曇時々雨（ボクシガンジ最終日）

今日はボクシガンジからダッカへ向かう。田舎の生活で、皆心がのびのびしていたため、帰るのがいやそうでした。ジャマルプールからボクシガンジと一緒に過ごしたショフィークさん、ハビブさん、モクレスさん、バシエットさんとお別れです。もうバシエットさんのマジックも見られなくなってしまう。皆で、車の中で歌を歌ったりしましたが、ダッカとジャマルプールへの分岐点が近づくと、バシエットさんの、日本語でのお別れのあいさつがありました。みんな、これには言葉も出ません。スタッフ達は、リキシャでジャマルプールへと帰っていきました。

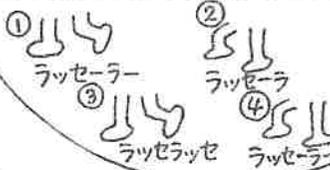
本当にスタッフ達にはお世話になりました。惜れないバングラデシュでの私たちを、本当に一人ひとり気遣ってくれました。

もう田舎を見るのは最後なのだといいながら、しっかりと景色を目に焼きつけとおこうと、必死になって車窓に目を凝らしました。もうすぐダッカについて、Bチームと台流です。ダッカに着くと、圧倒的に多い人や、排気ガスにびっくりに戻ったのだ、そしてもうすぐ日本に戻るのだ、という気持ちになりました。

# Aチームの流行

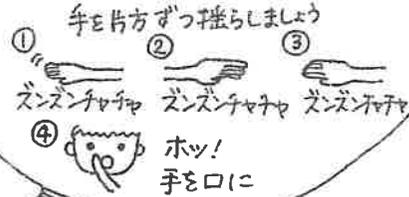
## ラッセラー

これは青森のねぶたダンスです。ケン先生の指導で皆で(もちろんバンクラの人も)踊ってました。ケンケンしながら「ラッセラー♪ ラッセラー♪」と歌いながら。なんて簡単! おなごんもLet's dance!



## ホッ!

又私達踊ってます。リエ先生指導で「ズンズンチャッチャッ、ズンズンチャッチャッ、ズンズンチャッチャッ、ホッ!」と…。意味わからなくてですね。子供にやらせたらとてもかわいい♡ スタッフの方々もなびなびとかわいかった。



## マジック

バリエットさんマジックはとても素敵でした。もうネタバレバレ。時々失敗もしてるし…。でも修業している様で10回に1回くらいはネタわからなかったかも。彼の得意ネタは物が消えるネタでした。ヤ、物を捨ててるネタでした。



## ガン

バンクラの言葉で「歌」という意味です。学校で子供達といってもスタッフの方々といっても常に歌っていた気がします。バンクラの歌はとってもきれいで、ハモントさんが歌うとよりきれいで…。感動します。言葉が通じないからといって、歌は知るとバンクラの人と結びつくる。新しい言葉とほり、心を結びつめてくれました。

**注** まだたくさん流行したんですが…書ききれません! ATeamのみなさんごめんなさい!

## おもしろい発見

井上儂子

昔、アメリカから日本にやってきた人の話を思い出します。彼は日本語がまったく分からないので不安でいっぱいでしたが、朝起きると、泊めていただいた家の犬が、英語でなっていたのでホッとした。というのです。その家の犬は「ワンワン」となっていたのですが、彼の耳には「パウワウ」と英語でなっているように聞こえたのです。人間の耳はおもしろいものですね。

バングラデシュでも犬は「ワンワン」となっているのですが、バングラデシュの人たちの耳には、「ゲウゲウ」と聞こえるのです。これが、ベンガル語のなき声です。

今年は、学校訪問をするときの小道具に、動物の絵カードを用意していきました。「これはなに？」「犬は何てなくの？」「日本では、ワンワンとなくんだよ。」このなき声の違いに、子どもたちは、目を丸くして不思議そうな顔をします。都会のダッカの子どもたちと、北部農村のジャマルプールの子どものたちとも、ちょっと反応の違いもありました。都会の子どもたちは、象やトラなど実際に見たことのない動物でも、テレビで見たことがあったり、動物園に行ったことのある子どももいますので、元気よく答えてくれました。農村の子どもたちは、実際に見たことがない動物は、どうやってなくのかまったく分かりませんでした。ところが、もっと北部の山岳民族ガロの村に行ったときには、大変盛り上がったのです。半分以上の子どもが、象を見たことがあるというのです。トラも見たことがある、猿もいつも見ている、とそのものまねの上手なこと。トラは南の熱帯雨林にいたので、見るはずはないと思ったのですが、話をよく聞くと、山猫が森の中にいるということでした。

そこで、大発見。動物のなき方が、ベンガル語とはちょっと違うのです。ここではマンディー語が話されているので、それも不思議ではないのですが、何となく、日本語のなき方に近いように聞こえました。ネコは「ミャーミャー」猿は「キーキー」犬はいろんななき声を言ってくれたのですが、その中に「キャンキャン」というのがありました。一番驚いたのは、ニワトリのなき声。日本語では「コケコッコ」英語では「コッカドゥドゥルドゥー」ベンガル語では、「ククロックク」とまったく違うのです。ところが、さあ、ニワトリは何てなくの？と尋ねると、「コケコッコ」と答えたのです。

ガロの人たちは、ベンガル民族と違って、モンゴロイドで日本人の顔立ちと非常によく似ています。動物のなき声の聞き取りの分布図のようなものができたらおもしろいだろうなと思いました。

## ハッとさせられた子どもたちとの出会い

西島日巨 糸後

ツアーの思い出といえば多くの人との出会いがあったことだろう。中でも印象的だったのは子どもたちのイキイキした表情であった。おもに農村で過ごし、いろいろな学校を訪ねることができたので多くの子どもたちと出会えた。

曇り空になればたちまち暗くなってしまうような教室の中で、一生懸命先生の授業を受けていた。ノートは、まちがいを直すのに消しゴムでこすったら砕けてしまいそうな紙。それでも、それを大切に使っていた。まず、そこでハッとさせられた。私は保育士という仕事をしていて、子どもたちには紙を大切に使うよう口を酸っぱくしながら伝えてきたはず。ところが、自分の事となるとどうだろう。そのことを子どもに語るほどのふるまいができているだろうか？ 物を大切にしてきたつもりでいたが、ここに来て自信がなくなってしまった。そんな風に思いながらも少し授業に参加し、子どもたちに声をかけてみた。初めはとまどいを見せる子も少なくなかったが、一緒に遊んだりしているうちに笑顔を見せてくれる子もいた。慣れてくると、私たちに関心を持ってくれたのか「きいてきて！」と言わんばかりにたくさん話しかけてきた。私もその子たちのことをもっと知りたいし、話したい！と思ったが、時間が限られていると、言葉がわからなくて、もどかしくなった。それでも、学校を去るとき、とびっきりの笑顔で大きく手を振ってくれた子どもたち。その姿を背に嬉しさと切なさが入り混じって複雑な心境になった。こんなに心を動かされたのはどれくらいぶりだろう・・・と、またハッとさせられた。保育士になって6年経った今、何か忘れかけていたものを目の前に突きつけられたような気持ちを味わった。

この思いを大切に、仕事に取り組んでいきたい。また、未来あふれる子どもたちが大きく羽ばたいていけるよう、もう一度考えなければならぬと強く思った。



日本に帰ってみるとバングラデシュとはあまりにも環境が違うということが実感できます。ダッカの排気ガス、大勢の人、リキシャ、周りに広がる田んぼ、吹き抜きの学校、子供達の笑顔、バングラデシュの人たちが話すベンガル語、歌声。何もかもが懐かしく思えて、戻りたいという気持ちでいっぱいです。ここ日本では本当にすることが多すぎてじっくり考える時間もないからです。

私のバングラデシュへ行く動機は開発途上国を見たいという気持ちからでした。どんなに私たちと違う生活をしているのだろうと興味をもっていたのです。でも、それは私がすこしでも哀れみの気持ちを持っていたからかもしれません。だからバングラデシュ滞在の最初のうちは学校訪問をなぜしているのかもよくわからなかったし、予想していた事とあまりにも違ったため、自分でバングラデシュで何を得て帰れるのかもわからず、不安な状態でした。でも、次第に慣れていくにつれ、バングラデシュをよく見て行くにつれ、そんな気持ちは薄れていきました。次の事が決定的な理由となったと思います。

私はジャマルプールに行って、まだ学校が設立されたばかりで、識字率が0%の学校などを訪問したとき、本当に驚き、感動しました。それは子供達も大人の方々も学校を宝物の様に大事に思っていたからです。みんなが全員学校を誇りに思い、よりよいものにしようとする意気込みが伝わってきました。そして、私たちの訪問が子供達の関心を非常に引き、勉強する意欲を高められると聞いたとき、少しの時間の触れ合いでも役に立てるのだとわかり、とてもうれしくなりました。教育の機会があふれている日本とは違って、バングラデシュの人たちは教育に対し本当に一生懸命なのです。

滞在の間、私はいろいろな人に出会い、たくさんの物を見て、たくさんの事を考えました。文化が違って、言葉がわからなくても楽しい時間を過ごせました。ここ日本にいたらできなかったことだと思います。今回こんなにも素晴らしい旅ができたのも、無邪気なメンバー、スタッフの方々、バングラデシュの人々の暖かいおもいやり、やさしさのおかげです。このレポートを通して「ありがとうございます」と伝えたいです。またこれからバングラデシュを自分なりに知ろうとし、今回と違った視点を持って訪れることができれば良いと思います。

Aチーム 篠原 希

# D☆R☆E☆A☆M

牧野 菜穂美

一目を閉じる。

風になびくサリー、子供たちの笑顔、“オールナ”を“折って”歩く女性たち、机に向かう子供たちの真剣な大きな目、リキシヤのおっちゃんの方強い足と背中、踊り狂っているスタッフたち（特に、バシエットとオシム）とそれを見て笑い転げるメンバーたち。

一耳を済ませる。

車の騒音、風にゆれる木々の音、「ジー！」と元気に答える子供たちの声、シャゴルバッチャの鳴く声、「メ〜」（えっ？ 晶？）、儀子ギャグ、ヘモントさんのきれいな歌声。

一口を開く。

ドンノバット、「けーん、トイレー」、オシユビダ アチェ、“キー オシユビダ？”「ラッセラー、ラッセラー」、オシユビダ ナイ、「オーッス！」、アバルデカホバ。

一大きく深呼吸。

緑の草のにおい、排気ガス、キッチンからのカレーのいいにおい、チャーの甘い香り。

一心を静める。

・・・神の愛を感じる。

そっと目を開けると。

そこには一歩進んだわたしがいる。

彼らの夢と共に、自分の夢に向かって、わたしの体からも心からも離れることのないバングラデシュの体験と思い出と、そして現実と共に生きるわたしがいる。

彼らの夢は、わたしの夢・・・絶対に醒める事のない DREAM・・・

神さまが与えてくださったこの『ユメ』を、菜穂美は、“神さまと共に”歩いて行く。

## 足あと

ある夜 わたしは夢を見た

神さまと二人並んで わたしは砂浜を歩いていた・・・

砂の上に 二組の足跡が 見えていた

ひとつは神さまの そして 一つはわたしのだった・・・

しかし最後に わたしが振り返ってみたとき

ところどころで足跡が一組だけしか見えなかった・・・

「わたしの愛する子どもよ わたしは けっして お前のそばを離れたことはない

お前がもっとも苦しんでいたとき 砂の上に二組の足あとしかなかったのは

わたしがお前を抱いていたからなんだよ」



M・パワーズ

20世紀最後の夏、私はこのスタディー・ツアーに参加しました。今、日本へ帰ってきてあの2週間を思い出すと、自然と涙がこぼれそうになる自分がいて、こんなにも私の心が敏感になっていたことにびっくりしています。それはきっと、あのバングラデシュの地で、私が心から笑って（いつも笑っている奴だって子どもたちに紹介されちゃったっけ）、心から感じて、泣いて、考えて、楽しくて、嬉しくて、悲しくて、切なくて・・・と、なにもかもを心で感じる毎日を過ごしていたからなのでしょう。

あの国で出会った人達のあたたかさ、たくましさ、力強さ、面白さ、優しさ、そしてまた水に覆われた広大な大地も深い深い緑の木々達も、見渡す限りの田園風景も、目も喉もだめにするあのダッカの空気も、あの匂いも、時間の流れも、今の私にとって全てかけがえのないものになっています。たくさんの人達に出会え、あれだけの自然の中に身を置き、大きな優しさに触れ、愛に触れて、私はバングラデシュの地で「大切なものは目に見えないんだよ」の意味が少しわかった気がしました。

今も目を閉じると、さよならするとき握手した手のぬくもり、別れを惜しんでくれた淋しそうな顔、一緒に歌って、踊って大笑いした時の笑顔、子どもたちのほにかんだ笑顔、味ザワワの人達の優しくて力強い笑顔と汗、物乞いする赤ちゃんが母をまねてねだる表情、そして、その人達のどこまでもまっすぐで澄んでいる瞳が次々と浮かんできます。目が合うと、目の奥の方からぼちっと視線が合う感じで、そのすべてを語りかけてくるような瞳の力の強さに毎日ドキドキしていました。

たくさん歌って、踊って（笑）、おしゃべりして、ろうそくの灯の下で一緒にご飯を食べて・・・贅沢で至福の時、本当に「豊かな時間」ってこういうことを言うんだろなって心から思いました。そんな素敵な時間を共有し合えた仲間達に心から感謝しています。本当にありがとう。人と人がつながるのって時間の長さじゃないことをこのスタディー・ツアーでつくづく感じ、日本は、人と人との間に必要のないものがありすぎるというのを今実感しています。

心がフル回転したこの2週間は私にとって何にも変えられない日々で、こうしてバングラデシュという国に出会えたことは、今の私にとってとても良かったと思います。得たものが大きすぎてうまく言葉にはできませんが、これから生きていく上でとても大事な事を与えられた気がします。私はこれから自分なりにそれをしっかり見つめ続けていきたいと思っています。



Aチーム  
ジャムールグループ  
のみんなです。  
ハモントさんと  
オシムさんも一緒  
にニッコリ。  
あつもりな人です。



A チーム

Bチームの美男美女  
がサリーに着がえ  
バンブーラヂッシュの人  
に变身です。  
みんなさっかいで  
しゃく? / さん  
はからさっかいで  
しゃく?



B チーム



かわいい子供達の中で、かわいいのりこさんがいます。みんな楽しく勉強しているところです。ここで問題です。のりこさんはどこでしょう。わかった方はご連絡下さい。

寺子屋の子ども達



スタッフとツアーのメンバーとみんな一緒に撮りました。みんな仲良しです。そして、みんなバンブーラテシヤが大好きです。

スタッフとみんな一緒に

## バン格拉デシュでの体験

荒殿いのり

バン格拉デシュでは、いろいろと、戸惑うことが多かった。初めての海外旅行、2週間の団体行動、そしてバン格拉デシュ。団体行動では、Aチームのみんなから、様々なことを学んだ。Aチームはメンバー一人ひとりが、とても個性豊かで、一人ひとりから、本当に学ぶことが多かったように思う。そして、バン格拉デシュ。バン格拉デシュでは本当に、多くのことを見聞きし、体験したため、未だに頭の中が整理されきれしていない。バン格拉デシュの自然、人々、社会。決して忘れてはいけないと思うし、忘れられないと思う。今、私の中では、バン格拉デシュへの様々な思いが渦巻いている。この思いを抱きながら、私に出来ることを考え、実行していきたいと思う。

最後に、一緒に行ったメンバーの方々、ACEFの方々、BDPの方々、バン格拉デシュの方々、お世話になったの方々、どうもありがとうございました。



# 子どもたちが教えてくれたこと

倉嶋美笛

私にとってバングラデシュでの生活は、何もかもが新鮮でした。そしてたくさん学校の村を訪問し、多くの人と出会うことができ、2週間とは思えないほど充実した日々でした。

すべてが素晴らしい体験で、何から書いてよいかわからないほどですが、やはり一番印象的だったのはBDPスクールに通う子どもたちの姿でした。子どもたちが大きな眼をもっと大きく見開いて先生やヘモントさんの話を聞いている姿、真剣な表情は、私に純粋な心を取り戻させてくれました。そして、自分が初めて学校に行き、どのような気持ちで勉強し始めたのか、また、将来何になりたかったか、など今の自分が忘れていたものを思い出すことができました。初心に帰ったことで、自分が何をしていきたいのか、今の自分には何ができるのかを考え直すよい機会が与えられました。このことを無駄にしないように、もう一度バングラデシュで得たことを思い返し、自分を見つめ直したいと思います。

最後になりましたが、バングラデシュでの生活を支えて下さったBDPのスタッフの方々には本当に感謝しています。そして、今回一緒に過ごしたメンバー一人一人に心から「ありがとう」を言いたいと思います。これからもっともっとBDPの活動が発展し、多くの子どもたちが教育を受けることができるようお祈りしています。

# Bチームメンバー紹介

我ら  
F-Wingの  
船戸先生



通称. ムツゴロウさん.  
子どもと動物を  
こなく愛する  
お父さんのような  
お方. お子と  
ゲンコツが飛ぶ?!

通称. 1ムさん.  
普通は東洋館で  
国語の先生を  
してるというが.  
バングラでは  
南京玉すだめ  
肉団. 輪にならぬおどろ  
をみだり... はじけまじい



野村正宣

バングラを  
一番堪能しているのは  
なにかと思うのが  
この人. 通称. トク.  
保母さんというだけあって  
子どもの抱っこは  
天下一品. いつも  
全力投入. 実績がすごい...



徳永由紀子

通称. ハナ.  
バングラでは美人女優  
シバダに似ていると  
言われるが. 常に  
熱い視線をみくら  
づけていたらやましい.  
(H. シバダは今40代だと知り  
あて ショックを受けていた.)



空華浄子  
英語は下下生の  
レベル

渋谷直子



通称. まろこ先生.  
バングラで一番食を  
堪能していた人.  
一番堪能しすぎて  
お腹痛くなる...  
いつもは. 知的で  
偉い. しっかり者の  
頼り下生. 当然に合  
格. 中の人気者始

うににおどりに  
夢中のいけみ  
もうだれも止めら  
れぬおに...  
未来の白衣の天使  
はタヒエルに  
LOVE♡でしに  
このページの似顔絵  
をクリス



谷口依都美  
(看護大学生)

英語ペラペラ.  
いつも通訳おがら  
ギャグセンス  
ばうぐん. ツバに  
踊りのセンスも  
いい子. ヨーゴ.  
ものまねも最高! 今回はお笑. 担当  
だったけど. 一度ニューマーケットでしこく. 買物に  
つぎまわって大奮. った. った.



本間洋子  
(東京女子大)

南西弁のヨーゴ.  
バングラでは.  
熱を出し寝こむ  
ことが多かった.  
でも. 池で泳いで  
さらに熱が...  
マンゴーを主食としていた.  
よほど美味しかった. っ. っ.



北野祥子  
(東京女子大)

フルーツを出しものを  
 もり上げとくしたさみ。  
 なんし、シエがおぼれ  
 死にかけたとき、  
 スタッフのバーブさんに  
 目かけられるという  
 劇的な体馬車がある。  
 Love  
 とは因果バーブさん♡だ、たはす'なのだ'か? (看護学生)



石川 葵

通称 ママ。いつも  
 ニコニコパワーで  
 1200円ほど何気に  
 あるといつこみ入れる  
 現役女子高生、キティを  
 似せしめた11にこの  
 11。煎で笑った心で  
 泣くのはこのことだ。



青藤 唯美

# カテラの スタッフ紹介

**TOP**

**シャブールさん**  
 私達の向では、プリンスと  
 呼ばれる。優しさに溢れ  
 知性的で、(少し私に  
 歌を教えた。



**シャブールさん**  
 美人で優しい。シエが  
 プリンスシャブールに  
 プリンス入りのような  
 小生。もう、今ごろは  
 お母さんには  
 なるらしい。



**クニエさん**  
 踊りが大好きな  
 クニエさん。  
 おちやめ、ま子で  
 少年のような人。  
 いわゆるキラと目と  
 輝かし、踊って...



**シゲセツさん**  
 いわゆるキラと目と  
 輝かし、踊って...



**ビーグルさん**  
 かわいい息子も  
 息子は、目に入れて  
 痛くなるくらい  
 やらしいさん。



**バードさん**  
 さみりの命の恩人。  
 1日1時間節制し  
 ているだけであ  
 り、どうもに  
 頼れる人。



**スチーフの中  
 一番、ビノさん。  
 いろいろと私達の  
 お世話をやいて  
 下さる、ビノさん。**





日付	時間	行動	コメント
8月7日	17:00	Dubai ⇒ Dhakaへ	翌日Dhakaでストライキがあるという情報を聞き、予定より1日はやくDhakaへ向かうことにした
	18:15	YMCA @ Dhaka 到着	
8月8日	10:00	先生達との交流会@YMCA	先生によるメンディーに大喜び*
	15:30	家庭訪問	3つにわかれて家庭訪問 始めて足を踏み入れるスラム街
	17:00	Dhakaの街でショッピング	アイスクリームを食べる!!
8月9日	7:45	停留所へ到着 ※宮崎&スハラさんとお別れ…	Bus( SAKURA company )
			FerryBoat
Bus( SAKURA company )			
BabyTaxi			
	15:45	Kathira宿舎に到着	
8月10日	8:30	出発	徒歩で移動
	9:45	サッチモリアスクール訪問	
	11:00	ニコデモさん生家を訪問	ココナツジュースをいただく :-) 天然果汁100%
	13:30	サリー&メイク	
	16:00	Cultural Show@屋上	
8月11日	9:00	出発	バンガリに乗って!!
	10:20	カタルバリ小学校訪問	村のボスが飲み水の不足を訴えてきた!!
	午後	FreeTime	沙織が溺れた!! バーナードの救助により一命を取りとめる…
8月12日	8:30	イーストバグダットBDPスクール	ボートに乗って!!
		校長先生宅	2人の愛娘を持つ校長先生が我が家を披露
	16:30	ヒンドゥーテンプル	リキシャで移動 アーティストちっくなおじさんが突然現れ歌を披露
8月13日	6:30	ラジオ体操	ダニエルさんといっしょに体操
	8:10	聖日礼拝	
		ビープルさん宅訪問	
	昼頃	サッカー国際試合	BDPstaff VS のむ&とく
	午後	FreeTime	バングラディッシュのど自慢!!
8月14日	8:00	出発準備	
	9:00	Kathiraオフィスを出発	バス停までリキシャで移動
	18:20	Dhakaのバス停到着	

## カティラ事件簿 !!

### File 1 船戸先生のゲンコツ

皆でアイスクリームを食べようと Dhaka の街に繰り出したとき。クーラーボックスを覗きながら、店の少年に「いくらか？」と尋ねた先生だが、あまりの高額に疑いを持ち、店の主人にもう一度問い合わせた。案の定ぼったくりを企んでいた少年の頭にガツンと快心の一撃が飛んだ。それをみたメンバーは唾然…。船戸先生の前では良い子でいましょう。

### File 2 さおり溺れる

眩しい日差しがすべてを包み、Kathira の午後はいつもどうりゆったりと流れて行った。池で遊ぶトクやスタッフ、子供達の声が遠くから聞こえる。誰もがこの国の豊かな時間を満喫していた。そんな中、けたたましい叫び声が起こった。「ハナ !!」ハナが急いで飛び出した。それからしばらくして茫然自失のさおりと彼女を支えるマナミの姿が現れた。後から聞いた話では、頭まで沈んださおりを助けてくれたのは、バーナードだった。彼女を抱きかかえ岸まで運んでくれた英雄バーナードは、事の重大さに気付いていなかった。翌日「Saori, Swimming?」と明るく声を掛けていた。

## 異文化体験記

### 長距離バス

まず日本では考えられない。2等車を予約したっていうのに、窓ガラスはひび割れ、座席のシートはスポンジが飛び出している…。しかもドライバーったら、渋滞のハイウェイをすっ飛ばす。前の乗用車を高速で追抜くものだから、9時間の長旅に酔わない人はいたのかしら？とにかく Bangladesh の文化を肌で感じました。

## Bチームの思ひ出

### かにむかし

バングラ各地で披露した「かにむかし」。評判は上場。

<役者>

かに⇒いづみ

くり⇒はな

はち⇒さおり

牛糞⇒まちこ

うす⇒まなみ

<ナレーター>

のむ、とく、ようこ、しょうこ

### とにかく熱かったシェアリング

毎晩繰り広げられる Sharing は深く熱いものだった。ときには BDP スタッフも交えながら、白熱した議論を展開しました。

<話題は次のもの>

- \* rule of social community
- \* moral
- \* working as a woman
- \* mobile phone
- \* respect for gender
- \* young mother's problem
- \* japanese identity
- \* japanese religion

## エイ！ カティラ

野村 正宣

### <SCHOOL VISIT>

カティラのBDPオフィスからリキシャで1時間ほどのところにカタルバリBDPスクールがある。生徒338人、先生8人の比較的大きな学校である。小学5年生のクラスを担当しているのはRITA先生、英語の授業が始まっている。最初に米や油を生徒たちに見せている。テキストを読み始める。生徒も続けて読む。声が大きい。皆、指で活字を指しながら丁寧に辿っていく。この日は「countable nouns, uncountable nouns」の学習である。テキストを生徒と一緒に読みながら、riceやoilの単語がuncountable nounsとして出てきた時、最初のRITA先生の授業の導入の意味が納得された。そこで考えた。しばらく授業見学の後、また自己紹介をして何かやることになるのだろう。ならば、今のこのRITA先生の授業を引き継いで発展問題を出してみてもどうか。面白い。そこで思い巡らした…今あるもので何か…cap、camera、bag、…冠詞がanになるものは…apple、orange、…数えられない名詞としては…sugar、salt、water、…よし、できた。これら思いついた名詞を出題し、countable uncountableの分類をし、冠詞a、an、なし、の確認をして、私の授業は終わった。思いがけずRITA先生とチームティーチングできて嬉しい経験だった。そもそも子供たちが、RITA先生の指示に従って元気よく読み、質問にたいそう自信ありげに答え、時にはスペルを間違え(oilをoliと書いていた生徒には隣に座った私が添削した)、とにかく一生懸命やっている姿に導かれて「じゃあ、これは？」という展開だった。教師の癖(!?)であろう。生徒が授業の中で生き生きと取り組んでいる姿に思わず触発される、そういう『癖』ならばいつまでも保ち続けたいと思う。RITA先生は今日はどんな工夫を用意して生徒の前に立っているだろう。そんな思いで、私もまた今日、生徒の前に立つ。

### <SHARING>

カティラでの2日目、8/10(木)のシェアリングは印象的であった。夜中の1時まで及んだ。その日はサッチモリアBDPスクールを訪れた後、女性はサリーを着せてもらってカルチャーショーを体験した日である。歩いて学校訪問に行く途中、洋子ちゃんがファルークさんと「日本人のアイデンティティ」について結構話したことをシェアリングで報告した。加えてバンダラの文化に触れる内容の多い一日だったからだろうか、私たちが日本に関する事で誇りに思うこととは何だろうか、という各人自身に対する自問がテーマになっていったのである。話は深まり、宗教性の内容にまで及んだ。私はこの時の話し合いにおいて、最も根源的なところでの結論は出たと思っている。つまり、「神なき民の国」か、「神ありき民の国」か、ということである。宗教は？と問われて「nothing」と答える人が多い国か、少ない(そんな答えはない)

国か、ということである。「神なき民」の多くは、たぶん神を畏れることをしない。だから「誇りに思うことは？」と問われても、「和を尊重する心」だとか「誠実さ、優しさ」などという答えになる。あまり答えになっていない。後日、日本の誇りは「生活していて安全であること、正直さ」と答えた人がいたが、果たしてこれが答えになるだろうか…。いずれにせよ、このような話ができただけの時間は貴重な時であった。見たこと、聞いたこと、感じたこと、わかったこと、わからなくなったこと、嬉しかったこと、ショックだったこと…スタディツアー中に個人に去来する思いと経験は計り知れない。それらの一部を互いに言葉にして出し合う。Sharing : (分ち持つ、分ち合う) という意味が改めてふさわしいと感じる。カティラのゲストハウスの2階のテラス。蚊取り線香の匂いが漂い、キンカンを塗りながら一人一人の話に皆が耳を傾ける。夜空には月。トクと一緒に三日月を仰いだのは初日の頃だった。この日は弦月を過ぎ、満月へと向かい始めていたのをトクは知っていたらうか…。

カティラ村にはいつも池と川と、そして風があった。ニカディモさんの家の庭は地平線へと繋がっている。遥か彼方から庭に吹く風を「ナチュラルエアコン」と言っていた。川を進む舟の屋根の上で、皆、大声で「エイ・ポッター」を歌った。トローマン少年の引くリキシャは燃える夕焼けを右横に見て力強く走った。いつもそこに吹いていたあの心地よい風が、今も時々自分の中を吹き抜けていく。再びあの風に出会いに行きたい。 エイ！ カティラ…



## 生きていく手ごたえを感じられた



徳永山糸子

バン格拉デシュから帰って、また保育園で奮闘する日々、気付けば報告書提出メ切2日前、さあ書くぞ、と思っただけで頭が浮かんだことは、バン格拉デシュという国に出会えて、たくさんの素敵な人々に出会えて私は本当に幸せだなあという思いだ。

私は仕事の研修で知り合ったバン格拉デシュ生活経験者の五辻涼子さんの話を聞き、バン格拉デシュへ行くことを決めた。きっかけはひよんな事だったが、バン格拉デシュに行くべきにして涼子さんに出会えたように思う。これだから人生は面白い。

バン格拉デシュについてからの日々は生活に戸惑う、というよりも次々と湧き出てくる思いや疑問で胸がいっぱいになっていくのを感じた。そんな思いに部屋で、リキシャの上で、シェアリングで、・・・メンバーやスタッフ（つたない英語にも関わらず）が耳を傾け寄り添って一緒に考えてくれたことは何よりも嬉しかった。それにしてもたった2週間だったとは思えないほどたくさんのことを感じ、日本の文化、バン格拉デシュの社会など実にたくさんのことを話した。今、そのことが自分の中で大きな存在となっはっきりと残っている。中でも私は人の中で生きていくんだ、自分を受け止め支えてくれる人がいればもっと自分らしく自信をもって生きていけるんだという手ごたえを感じられたことはとても大きい。ずっとこの仲間に感謝する気持ちを忘れずに大切にしていきたい。

もう一つ、子どもは（大人にも言えることだが）家庭だけでも学校だけでもなく、大きなコミュニティの中でみんなに支えられながら育つことが一番望ましい、と身をもって感じ、これから自分が何を大切にしていきたいのかが少しずつ見えてきた。シェアリングの時の言葉を思い出す。「自分たちのフィールドは日本なのだ。」バン格拉デシュに行って自分の気持ち一つで、そして周囲の人の支えがあれば、やりたいことに向かっていけるのだという自信がもてた。自分にとっての大きな起点となったバン格拉デシュにまたいつか帰りたいと思っている。

バン格拉デシュも、スタッフも、船戸先生も儀子さんもメンバーも、みんなみんな、だいすきです。ありがとう。



洪倉真千子

ダッカの土地を離れてから幾らか時がたち、バングラディッシュでの経験をじっくりと考えてみました。

そもそも私が何故スタディーツアーに参加したかについて、旅先で皆にお話したと思いますが、ここで改めて書きたいと思います。

高校時代に NHK のドキュメンタリー番組を見ました。名前は覚えていませんがある NGO の紹介をしていました。丁度わたしのような大学生が「タイに学校を建てよう」というプログラムのもと、現地の子どもたちと共に土木作業を行う姿が印象的でした。「発展途上の国の力になりたい」確かリーダーがそうインタビューに応じてたと思います。ところが、面白そうだなあという私の興味と当の NGO を否定するように、コメンテーターが次のような発言をしました。「タイに近代化を進めることは、日本ような問題を抱えろと言っている様で、僕は賛成できない。発展途上国より先進国が、人間の幸せを実現しているなんて言えない。発展途上国の人々へのボランティアは日本人の奢りではないか。」これには私も考え込んでしまって、結局気軽にボランティアに関わることは慎むべきだと考えるようになってしまいました。

大学生活で偶然にも ACEF と出会ってから間もなく、その番組が話題に上ったことがありました。驚くことに ACEF のメンバーは批判に対する更なる回答をもっていました。「自己満足であれ、実際に助けを必要とされているのならば、私達は手を差し伸べる」と。私は、それを確かめるためにツアーに参加しようと思いました。

スタディーツアーに参加して、バングラディッシュの人達が実際に助けを必要としているのをまのあたりにしました。教育が普及されていない現状では、近代化の道を進むのか、それとも別の道を取るかの選択肢すらない状況です。日本の近代化が多くの問題を孕もうとも、そう選んだ自由はあったはずです。

聖書にもとづく平等観に従って、発展途上国の援助をすることは、理にかなった方法ではないかと思います。

いまでも遠い空の下で BDP スタッフとバングラディッシュの子ども達が元気に暮らしていることを願います。 35

バングラディッシュでは「ドキッ」させられてばかりいた。空港を降りたときから、買い物の時、移動中など常に物ごいの子供たちが寄ってきた。子供たちだけではない。盲人、赤ん坊を抱いた母、本当に多くの人が私に向かって手を差し出した。私はどうしてよいか分からない。私がどんなに善人ぶろうと、彼らの前では常に裸にされ、日本人である自分の姿が映し出されていた。それは、本当に目を背けてしまいたい姿だった。

しかし、この国では違う意味で「ドキッ」とさせられることの方が多かった。スラム街での幸せそうな家族、学校での子供たちの笑顔、熱心に教える寺子屋の先生、職業訓練所で真剣に学ぶ少年の顔、大人びた表情で踊る少女たち、BDPスタッフの心からのもてなし……。何より、彼らの澄んだ目にドキッとさせられた。そして、私の目はこんなに澄んでいるだろうか、私は彼らのように心から相手を受け入れ、もてなすことができるだろうか、この子供のように現実の厳しさに負けずに心から笑えるだろうか、という疑問が湧いてきた。今の私にないものが彼らの心の中には存在していた。私は本当は彼らのように生きたいと思っていながらそうできない自分がいる。

しかし、仲間と心から笑ったり、自然の美しさや風を感じたり、子供たちと触れあう時間は本当に豊かで、忘れかけていた「自分らしさ」のようなものを思い出すことができた。人は豊かな人間関係の中でこそ本当の自分を見つけることができるのだと思った。出会った一人一人に心から感謝したい。そして、彼らから受けたもの、学んだことを大切にして生きていきたい。



## —第19回 (2000年夏季)

スタディーツアーに参加して—

空華 浄子



ダッカのスラムにあるBDPスクールの生徒の家庭を訪問したときのことである。我々はその小さな家に入り、ふと入口を見るとそこはものすごい人だかりであった。

少し恥ずかしがりながらも、楽しそうな笑顔を見せている小さな子供達が10人ほど押し合いながら家の中へ入ってきている。少し年上の子が、そんな年下の子供達を注意し、得意げな顔をする。

(いったい、ここは何人家族なのだろう？みんな仲良く楽しそう。それにしてもたくさんいるな…) そんなことを思いながら、家族へのインタビューを試みたところ、その家の住人は5人であることがわかった。

スラムにいるほとんどの子供達が、裸足に着古した洋服を身にまとっていた。街で物売りをして家計を助けたり、中には物乞いをしたりしている子供もいたことであろう。そうした経済的にかなり苦しい境遇にいるにもかかわらず、彼らが暗い顔などせずに生きているその秘訣は、スラムという大家族の中でたくさんの人たちに育てられているからだったのだ。

スラムでの貧しい生活環境よりも、人と人の関わり合いが生活の基盤であるコミュニティの中で育つ人としての豊かさ、あたたかさがとても印象的であった。

バングラディッシュ南部の村カティラを発つ前日、15歳の女の子が我々Bチームを訪ねてきた。その子の家へ招待されたのでついて行くと、彼女は小さな家の小さな引出しから口紅やマニキュア、アクセサリーなどを取り出し、楽しそうにいろいろと私を着飾ってくれた。

「あなた、そのネックレスとても似合うわ。あなたにあげる。私たち、もう姉妹ね。」彼女は笑顔でそう言った。そして、「そう、私たちは姉妹なんだから、日本にいる私の両親に会いたい。」「?!……」「だから私にあなたの日本の住所を教えて。」「……」「ねえ、私の言ってることわかる？私は日本へ両親に会いに行くの！あなたの住所を教えて。」彼女は、つたない英語でなんとか私に伝えようと必死でそのようなことを繰り返して語りかけてきた。

カティラからダッカへの帰路、ゆつくりと進むフェリーの上から山のない景色を眺めながら、バングラディッシュで出会った人々や様々な経験について考えていたが、疑似体験とは全く異なる実体験による衝撃の重さに、何を感じたのかさえまとまらない状況であった。

もう一度バングラディッシュに行き、彼らと向き合って話してみたい。そうすることにより、自分なりのバングラディッシュとの関係が見えてくるのではないかと思う。

最後に、本当にお世話になったBDPスタッフの方々やツアーのメンバー達に出会えたことに感謝します。ありがとうございました。

バングラデシュにおける二週間は自分にとって、自分の人生において、非常に貴重な時間であった。進路について未だ悩んでいた自分は、おかしな使命感のようなものに駆られて、何の迷いもなくこのスタディーツアーに参加を申し込んだ。

この機会を与えてくださった天の父なる神様、そして家族、全ての人々への感謝の念を忘れないようにしたい。

ゆるやかな時間の流れの中で沈思黙考することができた。そこで自分が感じたこと、考えたこと。豊かな自然。のどかな風景。プリミティヴな生活。人と人との交わり合い。心の触れ合い。バングラデシュの農村では人々が非常に美しい生活を送っていた。私達はそこにいたく感動した。羨ましさ迄感じた。しかし、シェアリング通して、しばらく考えて、搾取による経済的豊かさを日々享受している日本人の自分が、最貧国の良い点ばかりを多数挙げて、「羨ましい」等と軽しくつぶやいて諷いものなのだろうか、と自分を疑うようになった。それならば自分は、この農業中心の自給自足生活へと切替えることが出来るだろうか。自分の矛盾に気付いてしまった。確かに私達は物質的豊かさと引き換えに心の豊かさを失ったのかもしれない。自分も未だ学生ながら「最近の日本人は」「今の若い人は」等と言ってみたりする。自分も実体験を通してモラル・ハザードを感じていた。日本では特に家族の絆の希薄さを指摘される。親に敬意を表さない子供、威厳のない親。昔の日本と比べると形態は変わってきた。バングラデシュのスタッフは皆、「the first priority is my family.」と口々に言っていた。私達は堂々とそういう言葉を口にして聞いて、彼らを尊敬した。そして自分達は…と考えた時に、日本人を卑下してしまった。しかし、冷静に考えてみると、自分も家族が一番大事である。家族の問題に限らず、言葉にせずともその意識は日本人も変わらないのではないだろうか。日本人・ベンガル人と大きく括ると難しいが、意識の高い人間なら誰でもそういった精神面も保っていられるはずだろう。私達は明日の食糧の心配をする必要がない。しかし、多くの諸問題のため日々頭を抱える。如何なる状況に置かれても結局は自分の意識次第なのかもしれない。行き詰まった時、今までいかに外部へ責任転嫁していたかを知ることとなった。

話がずれてしまったが、今回の旅でたくさんの物事を考える機会を得られた。良き仲間に出会えた。会話ができた。たくさんのものを見た。自分を解放できた。感動した。

私はまたこのツアーに参加しようと思っている。

『ACEF STUDY TOUR に参加して』 石川 紗織

バン格拉ディッシュにでかける前、私の中にはツアーに対する深いテーマは特に存在していなかった。実際にいろいろなことを経験し、感じた時に何か得る物があるのではないかと、期待をしていた。まず感じたことは、本当にこのツアーに参加して良かったということだ。今まで知らなかったこと、気がつかなかったことがたくさんあった。毎日いろいろな体験をする中で、それらを見つけた。チームの仲間とのシェアリングの中で、それらについて考えた。同時に、日本で生活している上での自分の生活や、普段あまり考えない自分の内面などについても、ゆとりのある生活の中で、見なおす時間を与えられた。日本人である自分にとって当たり前のことが次々と当たり前ではなくなっていくことに最初は驚いたが、現実として受け入れられた時、生活に余裕と楽しさが広がった。たくさんの素晴らしい人々との出会い、異文化との交流、その他このツアーで得た物全てが自分にとってプラスになったと思う。バン格拉ディッシュで過ごした二週間は、思っていたよりもずっと早く過ぎていった。もっともっと知りたいことや考えるべきことがたくさんあるから、またバン格拉ディッシュを訪れたいと思う。たった二週間の間に経験したことは私にとってかけがえのない思い出になった。



バングラは私にとっての初海外となりました。2週間も行ったから、書きたい事は山ほどあるけど、とりあえず思った事をそのままざっとつづりたいと思います。

まず、ダッカに到着し、空港からバスに移動するまでに、いわゆるストリートチルドレンに会いました。これが一番初めに衝撃を受けた時です。私は、この時、事実カワイソウではなく、なぜかコワイというイメージを受けてしまいました。周りがなんか緊迫した雰囲気、が漂ってたせいかもしれません。とにかく、このコワイが最初の私のバングラ生活にかなり影響したような気がします。

そして、カリタスで初めての夕食。手で食べることなど、バングラの食生活になかなか馴染めないことを、すでに悟りました。トイレトペーパーはないし、水浴びはマジで水浴びでお湯出んし、寝る時はかやの中に入らんとあかんし……。ほんとにあの時は、もう自分でもこれからどうなるのか??もう、心配やら不安やらでいっぱいでした。ここを乗り切ったのは慣れ?じゃなくて、はっきり言ってあきらめだったのかもしれませんが。それに、自分でバングラ行くことを決意した以上、こんなことでつまずいてたらあかんと思えました。

でも、いろんな人と出会って、わからないなりの英語でいちおうコミュニケーションとっるうちに、コワイってイメージを抱いていて、ほんとに申し訳なくなりました。どうして最初にコワイって感じてしまったのかは謎です。そして、もっと英語の勉強しとけば良かった。ほんとはもっとお話したかったのに、英語が出来ない為に言いたい事がうまく伝わらず、ひもじかったです。

田舎では、すごい自然にあふれてて、ダッカの灰色の空気とは全く違ってました。山がなくて、見渡す限り地が続く、または水が張ってて、その上を浮き草をかき分けて舟を漕いでる光景は、心がなごみます。

バングラの交通手段の乗り物に全部乗ることが出来たし、カルチャーショーなど、このツアーの行程を作ってくれたBDPのスタッフに感謝です。ニューマーケットでも、自分の買いたいものがしっかり買えました。生活に馴染めないという問題はあったけど、ほんとに毎日充実してたし、自分なりにすごい楽しい生活を送ってたと思います。スタッフとツアーのメンバーがいたから、私のバングラでの生活があったんだと思えました。

最後に、ストリートチルドレンとかスラムのことを書きたいんですけど、やっぱり、實際目の当たりのしてみると、どう対応していいのかわかりませんでした。与えたところで、その人の生活は何も変わらないし、きりが無い。ほんとに来る度に悲しくなって、目を背けてたっていうのがほんとのところなんです。私自身、苦しかった。でも、こうゆう現状に出くわさないより、出くわして良かったんだと、日本に帰ってきてから思いました。そして絶対忘れてはいけな  
と思えました。

そして、バングラでの貴重な体験で得た知識、いっぱいいっぱい自分の中で感じたこと、考えたこと、全部をこれから自分が生きてく中でいかしていきたくてすごい思いました。



## 新しい自分を探して・・・



1ヶ月の夏休み。その中での2週間。

毎年、補習や部活で忙しく過ごしているか、家でほとんど寝ている毎日だった夏休み。それが今年、たくさんの衝撃的な“現実”を見て、自分が少しだけ変わった。

スタディー・ツアーから帰って、1ヶ月近く経った今でも、「楽しかった？」と聞かれると、「うん。楽しかったよ！」と答えるけど、本当に楽しかったのか思い起こす時がある。確かに楽しかったことはたくさんあった。池で思い切り飛び込んだこと、蚊が蚊帳の中に入って必死になってつかまえたこと、ベビータクシーに乗ったこと。どれも、日本では経験できない、初めてのことばかりで、不安やとまどいから解放される時間だった。

しかし、私には、どうしても忘れられないことがある。ダッカの空港での男の子、赤ちゃんを抱き、手をさしのべる女の人、ニューマーケットでどこまでもついてくる子供達。

みんな冷たい手で私の腕をつかみ、「マダム・・・マダム、プリーズ・・・」と、今にもとぎれそうな声で物乞いをしていた。物があふれている日本での生活に、すっかり戻ってしまった今でも、考えなければならぬ問題は教え切れないほどある。

「こんな国があるんだー。」もう、これだけでは済まされない問題に、やっと気づいた。

欲しい物がすぐ近くになくて辛かった2週間。いつも身近にいた人がいなくて少し寂しかった2週間。そんなバングラディッシュに今、もう1度行きたいと思う。私にはバングラディッシュが合っているとはあまりおもわない。それでもなぜか、“ミリョク”を感じる・・・。やっぱり、一緒に行ったメンバー1人1人が魅力的だったからかなあ、と思う。また今度行く時もみんなで行きたい！！そして、バングラディッシュを私達で変えてみたい。それが私の新たな夢です。

ありがとうございました!!!!!!!

斉藤 愛実

8月14日月 ようび



ABそれぞれの  
ページ  
から

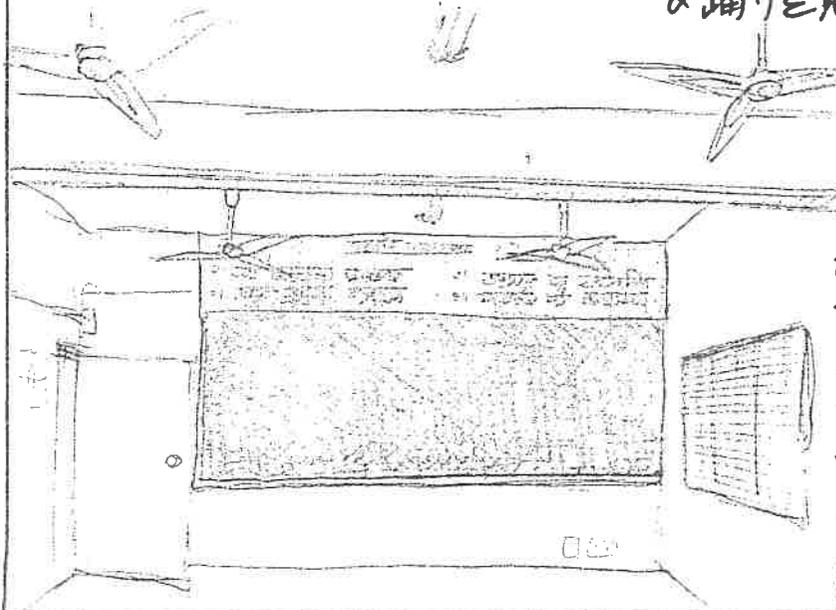
久しぶりにタッカへ帰ってきました。そして久しぶりにABチーム両者が顔を合わせました。Bチームの帰りが少し遅く、夕食ぐらいいから中々クリ話をすることができたのですが、それぞれジャムルアール、カティラであつた事をたくさん話しました。いくら話しても伝え切れず、夜もずこ話していた気がします。両チームが無事に帰って来て、笑顔で報告し合う事ができ、本当に良かったと思います。

8月15日 火 ようび

カルチャーショーへ行

きました。バンブーの子供達がたくさん踊りを見せてくれる中、私達も

負けじと歌、踊りを披露しました。この日、カティラからスタッフの方々が来てくれて、ショーが終わり、た後も、みんなで歌えや踊れや、歌合戦の様でした。夕食もみんな一緒に食べて、たくさん話をして、楽しい時を過ごしました。カティラスタッフと別れは寂しかったです。



8月16日 木 ようび

**博物館** 見学へ行きました。とても  
大きな所で、植物、動物の標本や絵  
バンブラの歴史を知ら様々の物が置い  
てあり、バンブラをより知る事ができました。



**バザール** へ再び買い物に行つたの  
ですが、ゆ、くり博物館を見学する事  
なので時間がはくは、てしまいました。  
でもスタッフの人が、労働時間を過ぎ  
ても私の案内をしてくれ、おんは目当て  
のおみやげを買つ事ができました。  
帰るのが遅か、たαで他のαスタッフは心配  
していたワゴ---。感謝です

ドン/ハット

8月17日

**帰国** の日になりました。  
あ、こいつ間の2週間でもう  
終わり!?と思わずには  
いられやんでして、全体で  
開会礼拝をし、感想を伝え  
合いました。そして、スタッフの  
方々と、今回知りあ、たツア  
ーのおんはとたくさん写真を  
撮りました。数人のαスタッフは  
空港まで見送りをしてくれました。  
最後の握手をして時々の  
ぬくもりは今でも忘れられせん。

18日

**飛行機** で爆睡している  
うろにあ、こいつ間に日本につ  
てしまいました。今度はツアーの仲間  
達との別れです。でもた、た2週間  
の間で、本当に仲良くなりました  
と思います。バンブラにいる間、本当  
にたくさん事を語り合いました。  
バンブラにいたからこそ、本音で  
語れたαだと思ひます。そして、  
バンブラで自分自心をも見直す  
事ができたと思ひます。  
又、いつかバンブラに行つたらいい  
ですわ

## ラッセラーin バングラ

中田 賢

私の同僚であるキムタツさんからバングラツアーの体験談を聞き、慣れない環境、不便な生活の中で生活し自分を鍛えてみたい。また、その生活の中でバングラについて学び、日本人について考え、そして自分自身をみつめてみたいと思いつター参加を決意した。

出発前日東京で携帯電話を紛失するというトラブル遭ったが、無事ビーマンでダッカに到着し、バングラでの2週間がスタートした。

バングラの香り、手カレー、水浴び、暑さ、蚊、トイレ、ベビタク、力車、停電、牛、羊、市場、壊れかけの橋、学校、村人、子供・・・見るもの、体験することすべてが、刺激的で私の好奇心を満たしてくれた。

一方、スラムや教育を受けられない子供たち等の現実問題を目の当たりにして、日本人である自分の出来ることは何か考えた。今後自分がバングラとどのように関わっていくかはっきり見えたわけではないが、あの笑顔のすばらしい子供たちのために何か役に立ちたいと素直に思っている。

便利な生活に慣れきっている私たちにとって、バングラの農村での生活は本来もっと過酷であるはずである。しかし、BDP スタッフの献身的な働きのおかげでほとんど不便さや、危険なくむしろ日本での生活よりリラックスし快適に過ごしたと私は思う。さらに忘れてはならないことは、A チームメンバーの圧倒的なパワー、明るさ、勢いが、知らず知らずのうちに慣れない生活を楽しく乗り切ってしまったのだと私は確信している。

今すごく気になるのは、私がバングラで披露した「ラッセラー」をバングラの人々が今でもやっているかである。バシエットならやってると信じてるのだが。今度バングラを訪問する機会があれば本物の「ねぶた」を造り「ラッセラー」をするつもりである。

最後にAチームのみんなへ、夏休み青森の「ねぶた」で集合しよう。そして、バングラじこみのラッセラーでおおいに盛り上がりよう。

ドンノバット アバデカホベ

第19回ACEFスタディーツアー参加者名簿(2000.8.4-18)

[Aチーム (ジャマルプール地区)]

- |   |                   |   |                                  |
|---|-------------------|---|----------------------------------|
| 1 | いのうえ のりこ<br>井上 儀子 | 331-0042大宮市奈良町97-46                     | 048-668-2942 ACEF事務局<br>浦和東教会    |
| 2 | なかだ けん<br>中田 賢    | 038-1144南津軽郡田舎館村田屋敷南佃14                 | 0172-58-2641 東奥義塾高校教諭            |
| 3 | しまだ かかり<br>嶋田 佳織  | 192-0363八王子市別所1-15-1, 2-505             | 0426-75-1635 保育士                 |
| 4 | しのはら のぞみ<br>篠原 希  | 332-0034川口市並木3-15-7-202                 | 048-254-3552 東京女子大地域2年           |
| 5 | まきの なほみ<br>牧野 菜穂美 | 600 James St. APT#102 De Pere, WI 54115 | 920-338-0370 St. Norbert College |
| 6 | やまぐち りえ<br>山口 リエ  | 206-0013多摩市桜ヶ丘4-36-37-502               | 042-339-2920 保育士                 |
| 7 | あらとの<br>荒殿 いのり    | 167-0041東京都杉並区善福寺2-22-1 茜寮              | 090-9149-3832東京女子大英文2年           |
| 8 | ひろた あきら<br>広田 晶   | 233-0001横浜市港南区上大岡東3-10-14               | 045-842-9273 神奈川衛生看護専門           |
| 9 | くらしま みふえ<br>倉嶋 美苗 | 229-0014相模原市若松3-31-1                    | 042-747-2054 東京女子大社会1年           |

[Bチーム (カティラ地区)]

- |    |                    |                                 |                                      |
|----|--------------------|---------------------------------|--------------------------------------|
| 1  | ふなと よしたか<br>船戸 良隆  | 359-1132所沢市松が丘1-20-2            | 0429-25-4685 ACEF事務局長<br>教団教師        |
| 2  | のむら まさのぶ<br>野村 正宣  | 350-1315狭山市北入曾349-2             | 042-959-7813 東洋英和中高教諭<br>東村山教会       |
| 3  | とくなが ゆきこ<br>徳永 由紀子 | 191-0031日野市高幡673-2-507          | 042-592-8123 保育士                     |
| 4  | しむくら まちこ<br>渋倉 真千子 | 167-0041東京都杉並区善福寺2-22-1 茜寮      | 03-3395-7308 東京女子大哲学3年               |
| 5  | たにくち いずみ<br>谷口 依都美 | 431-1304引佐郡細江町中川7172-1971 風声寮   | 053-523-2243 聖隷看護大3年<br>遠州栄光教会       |
| 6  | そらはな きよこ<br>空華 浄子  | 181-0013三鷹市下連雀3-17-17 スタイツ三鷹402 | 0422-47-9744 東京女子大地域                 |
| 7  | ほんま ようこ<br>本間 洋子   | 154-0017東京都世田谷区新町1-7-11-402     | 03-3425-8586 東京女子大英文1年<br>松木町カトリック教会 |
| 8  | いしかわ さおり<br>石川 沙織  | 233-0016横浜市港南区下永谷3-48-21        | 045-822-1507 神奈川衛生看護専門               |
| 9  | きたの しょうこ<br>北野 祥子  | 167-0041東京都杉並区善福寺2-22-2 北寮      | 090-2726-9877東京女子大社会1年               |
| 10 | さいとう まなみ<br>斉藤 愛美  | 036-8374弘前市土堂長瀬68-1             | 0172-37-3365 東奥義塾高2年<br>弘前クリス教会      |

✽ Bangladeshに寺子屋を贈ろう ✽

ACEFの会員にならしましょう

団体会費：年額一口 ￥50,000

個人会費：年額一口 ￥5,000

学生会費：年額一口 ￥2,000

ACEFに献金しましょう

クリスマス献金(金額は自由です)

一時寄付金(年間いつでも結構です)

アルミ缶回収と献金にご協力ください(年間いつでも結構です)

使用済みテレホンカード回収にご協力ください( " )

郵便振替 00100-0-185540

アジアキリスト教教育基金

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

TEL.&FAX. 03-3208-1925